

私とフルート

斉藤 公祥

SAITO Masayoshi

アイレック技建(株)
非開削推進事業本部
営業部(西)課長代理



1. フルートとの出会い

私とフルートとの出会いは中学からの吹奏楽部でした。そして、高校、大学でもフルートを持ち歩く学生時代を過ごしました。大学を卒業してからは、仕事に没頭してなかなか時間を作ることが難しく、楽器を手にすることが少なくなりました。

15年程前から吹きたくなり、時間を作り、今度はレッスンに通って継続しています。

自己流で吹いていた私が、音大出身者や専門の知識を持った方々と接する機会を多く得たことはすごく良い財産になっています(写真-1)。発表会にも参加し、フルートで音楽を表現することがとても楽しく感じていました。

「フルート族」について少し説明させていただきます。「フルート族」とは、フルートの仲間で構成されたオーケストラを意味しています。高音からピッコロ、ソプラノフルート、コンサートフルート、アルトフルート、バスフルート、コントラバスフルートとそれぞれの音域によってパートが分かります。

管弦楽とは違った魅力ある「フルートオーケストラ」を一度聴かれてはどうでしょうか。

私が保持している楽器は、ピッコロとコンサートフルート数本、バスフルートです。近く購入したいのがアルトフルートです。何かどっぷりはまっていますね。

コロナ禍も少しは落ち着き、活動も徐々に戻りつつあります。吹奏楽、定期演奏会・コンクール、フルートアンサンブル、フルートオーケストラ、音楽祭など、また、楽しみが増えようとしています。



写真-1 合宿練習でBass Fluteを吹く筆者(フルートアンサンブル)

フルートに出会ってなければ、素敵な仲間と楽しい時間を過ごすことはなかったと、つくづく感謝しています(写真-2)。また、吹奏楽部OBとして、母校の中学生や高校生の学生さんと一緒に演奏出来ることはとても若返ります。

2. 美しい音を出す

管楽器は一本の管で数オクターヴの音を出さなければいけません。常にピッチの良い状態で演奏するためには、使用する楽器のバランスをよく知ることが大切だと思います。

フルートの場合、頭部管(フルートは、頭部管+胴体部+足部管の3つに分かれます)の抜き差しが極めて重要となります。ベストな状態はオクターヴのピッチが合っていること。最低音のC(ドの音)を鳴らし(C管フルート)、その運指(指使いのこと)のまま1オクターヴ上のCを吹き(倍音を鳴らす)、その後、本来の運指(指使いのこと)で1オクターヴ上のCを吹き、その誤差を調整します。

このバランスの良い状態が最もピッチの良い状態であるだけでなく、楽器が最も響いている状態であるということです。

楽器のピッチが高めに調整されてしまうと、音は華やかになりますが硬くなり、一方、低めに調整されると、音に張りがなくなり暗い響きになります。

「ピッチを合わせること」は「音程の問題」だけでなく「楽器そのものの響き」にも影響することを知らなければならぬと思います。



写真-2 素敵な仲間(コンクールメンバー)



写真-3 消防団でのイベントの様子



写真-4 演奏会で楽器紹介中（フルートオーケストラ）

また、管楽器は息を送り込むことで鳴らす楽器ですが、正確でクリアなタンギングをすることと、キーをしっかりと押さえることも重要です。息・舌・指の3つを意識することで、より深く安定感のある音を出すことができます。すなわち、指の動きが悪い時は息の送り込み方が不十分、良い音が鳴らない時は指をしっかりと押さえていない、タンギングが良くないなど、相関関係の上に成り立っているというわけです。

美しい音を出すには、自身の身体と楽器が一体となって、美しく深い説得力のある音を奏でなければなりません。音の出始めから終わりまでを体に覚えさせることが大切です。そのためには以下のことを確認する必要があります。

①プレス

たっぷりとプレスを取ること。そのためにはスピード感を持って、たくさんの息を吸うことが大切です。そうすることで身体が共鳴し、豊かな音が出ます。

②次の音への狙いを定めるために一瞬静止する。

多くの人がプレス後、すぐに音を出す傾向があります。しかしそれは、的を射る際、狙いを定めず闇雲に矢を放つと同じことです。それぞれの音に対するアンブシュアや息のスピード、身体の使い方があはらずです。この準備があつてこそ、舌を引く「タンギング」という動作が可能となります。

③タンギング

良い音を得るためにはクリアなタンギングは不可欠です。タンギングに失敗した場合はノイズが入って、唇の緊張感がないため良い音はしません。②と③は連携しており、これから出す音に対応する息の圧力・唇の形状・アタックが一つにまとまって、初めて良い音が奏でられるのです。

3. 楽器を響かせ新たなステージへ

前述のように、先生の教えを守り練習に励んでおります。一連の動きを確立した上で、しっかり考えながらロングトーンを奏でたり、喉を広く開いたり、肩の力を抜くなどを試みるにより、身体と楽器が一体

となって美しい音を出すことができるようになっていくのです。

この動作は陸上の100m走のスタートダッシュに似ています。

①準備、②静止して集中、③一気に走り出すといった感じです。

本番前になると「緊張と不安」から調子（心・身体）を崩してしまうこともあります。本当は大好きな「フルート」のはずが、色々考えすぎて吹くこと自体が不安になり、嫌になり逃げだしたくなったり、やめてしまいたくなったり、時に、このような衝動的な気持ちになることもあります。でも、それを乗り越えて良い音を求めるのです。

音は ^{フォルテ}f でも ^{ピアノ}p でも、また、いかなる音域においても深みのある音を響かせなければいけません。「大きな音は良い音」と思っている人や、小さな音では息のスピードが足りず貧弱な音になっている人が多い気がします。

良い音とは身体と楽器とが一体となって、リラックスした状態から生まれるものです。

楽器を吹くのではなく、楽器を響かせることが大切だと思います。

こうして振り返ってみると、やっぱりフルートが好きなんだなあと思います。

社会貢献として消防団にも所属しており、防災イベント等では消防団即席バンドを結成して、イベントを盛り上げております（写真-3）。

音楽を通して人との繋がりを最重要視して、感動を求め、また与えられる様に一生フルートを奏でていきたいと思っています。

認知症予防や、健康の維持にも音楽は大きく影響を与えます。また、福祉活動でも病院のピロティでの演奏や老人ホームでの慰問演奏等活躍できる場合は、まだまだ沢山存在します。これからも、吹奏楽コンクールでの演奏や定期演奏会、発表会、アンサンブル、フルートオーケストラでの演奏を楽しみながら、音楽ライフも満喫したいと思います（写真-4）。